

みやびをと我は聞けるを
やど貸さず／我を帰せり
おそのみやびを

石川郎女が大伴宿禰田主に贈った和歌で『万葉集』第二巻に見える一首。冒頭の「みやびを」には「遊士」が、末尾の「みやびを」には「風流士」が当てられている。あなたは風流人だと聞いていたのに、泊めてもくれずに、私を帰した。なんて愚図で奥手な風流人だこと、という当てつけた。これに大伴宿禰田主は、こう返す。「みやびをに我はありけり やど貸さず 帰しし我そ みやびをにはある」と。あなたを泊めずに帰した私こそ、真の「風流士」なのだ、という居直りの返事だろう。周知のとおり、ここでは、「風流」の異なった意味のすれ違いが、贈答の妙をなす。石川郎女の言う「風流」は、異性との付き合いにおける洗練さの指標だろう。対する田主は、道徳的な節操、人格性を意味する言葉として「風流」を用いている。石川郎女の用法が、唐代以降の、場合によっては性的放縦や官能的な頹廃をも含む、舶来の最新流行の語意であったのに対し、田主は、

みやびをと我は聞けるを

《風流》の比較文化史の試み・上

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員、
総合研究大学院大学助教授

敢えて晋代以来の、伝統的な「風流」の語意に沿って反論することで、議論をすり替えてみせた。果たしてこのおとぼけ、野暮でなかったかどうか。

風流とは何か？ 今日においても、中国語の「風流」とは、美風の余韻、人品・風采あるいは精神の卓越性に重きが置かれる用語であり、代表格は、陶淵明(365-427)の、「菊ヲ采ル東籬ノ下、悠然トシテ南山ヲ見ル」に指を屈する。近くは毛沢東(1893-1976)の「沁園春 雪」。秦の始皇帝や漢の武帝も文采に疎かなところがあり、唐の高宗も宋の太祖も風騒が少ない。成吉思汗にしても、弓矢や軍事に秀でるのみ。まことの「風流人物」の登場には今日を待たねばならぬとする、誇大妄想を憚らぬ自画自賛の詩。軍略家・政治家であるとともに文才も兼備してはじめて歴史に名を残す英雄たりうる、との自負が「風流人物」という語彙に託されている。

(以下次号)

* 関周植氏(嶺南大学教授)の講演、「風流の東アジア—美を生きる技法—」第168回日本文研フォーラム(4月12日)での筆者のコメントを、関氏の許可の元に公表するものである。

うしたく日本の逸脱)は、早くは「風流者」(ふりゅうぎ)の異名を得た花山院(968—1008)から、永長元年(1096)の大田楽、『中右記』に「金銀の繡、風流ノ過差、美麗凡ソ記シ尽スベカラス」と記録された、大治二(1127)年の賀茂祭などの催し物にその例が辿られる。さらに、常軌を逸したように見えながら、実際には天の志に従う境地を理想とする荘子の「狂」と結び付いた、「風狂」、一休宗純の『狂雲集』に典型を見る脱俗が、そこに異形を添える。ばさらや歌舞伎への変遷のなかでは、1604年、豊臣秀吉の没後七周忌に催された豊国臨時大祭が注目されよう。トマス・ライマーの研究によれば、ここには南蛮渡りのバイジェントを取り込んだ、最新流行の側面が推測できるからだ。そして徳川期に抑圧されたこの風流踊りの熱狂は、今日京都市主催の「大風流」に継承すべく試行されている。

* 関周植氏(嶺南大学教授)の講演、「風流の東アジア—美を生きる技法—」第168回日文研フォーラム(4月12日)での筆者のコメントを、関氏の許可の元に公表するものである。

みやびをと我は聞けるを

Engilil/Pongnyul/Funyu: 東アジアの美的概念検討にむけた
《風流》の比較文化史の試み・下

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授

稲賀繁美

韓半島に目を移すと、『三國史記』にみえる新羅の真興王(在位540—576)にその起源を溯る「花郎」が注目に値する。道義をもって互いに錬磨し、歌楽をもって相互に悦み、山水を遊娯するなかで、才能ある若者を互選し登用する、という制度である。孔子、朱子と並んで韓国では尊敬を集めてきた李退溪も美的理念、人格の陶冶としての風流を強調している。韓国では今日も「風流」といえば、「俗事を離れ、風致があり、見事に遊ぶこと。花鳥風月を尊び、韻致のあること」が中心であり、その媒体として詩歌管弦が重視される。「花郎」(ファラン)は、社会制度としては衰亡してしまったが、今日なお、酒の銘柄として、その生命を維持している。

これら中国や韓国の「風流」と比べると、日本の「風流」は中世以降、大きな変貌を遂げたことが見て取れよう。小学館の『日本国語大辞典』を見ると、「美しく飾ること。数奇、意匠をこらすこと。華奢」などの説明が第三に見え、美的意匠に重きがおかれる。だが、この第三義は中国や韓国では存在しないに等しい。こ